令和４年度　Ｓ特選コース

第２回　入学試験問題　（２月２日　午後）

国　語　（50分）

注　意

１　この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
２　問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
３　答えはすべて解答用紙に記入すること。
４　**字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「　」（　）などの記号を含んだ字数として解答すること。**
５　印刷がわからない場合は申し出ること。
６　試験終了の合図でやめること。

東京都市大学等々力中学校

受験番号		氏名	

一

次の――線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

1、金物の生産が盛んだ。
2、久しぶりに同窓の友と会う。
3、鋼鉄製品が名産となっている。
4、旅によい日和だ。
5、大きな城を築く。
6、組織にカメイする。
7、余計な一言でボケツを掘る。
8、アンイな考えを捨てる。
9、都内のチンタイ物件を探す。
10、正しい方向へとミチビく。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

そのころ、祖母はいくつだったのだろう。

昭和三十六、七年の出来事だとすると、明治二十八年生まれの祖母はすでに六十の半ばを過ぎていたことになる。

だが、とてもそんな齢には見えなかった。豊かに結い上げた髪は、まったく烏の濡れ羽いろで、肌にはしみひとつなかった。

そのころの年寄りは、今とはまるで老け具合がちがっていたから、はたから見ればたぶん①化け物のような若さだったろうと思う。

僕はしばしば息子にまちがえられたし、母とは姉妹のようだったし、とりわけ養子だった父は、またばあさんの亭主にされたと、よく愚痴をこぼしていた。

麻布の写真館主という職業がら、洒落者(注1)だった祖父はやはり年齢より若く見えたが、それでも二歳齢下にもかかわらず、夫婦が並べばお似合いの齢回りに思えた。A、互いに口をきかずにいればの話だが。

（中略）

祖母と芝居を観に行った帰りがてら、銀座で寿司を食ったことがある。

ちょうど夕方のかき入れどきだったのか、店内は混んでいた。席についたとたん、ものの数分で寿司が運ばれてきた。腹をすかしていた僕がさっそく手を出そうとすると、祖母はきつい声で言った。

「②食べちゃいけないよ。出よう」

「どうしてさ」と、僕は訊ねた。

「どうもこうも、ともかく食べちゃいけない――ねえさん、おあいそ！」(注2)

祖母は蟇口から千円札を出して卓に置き、「釣はいらないよ」と捨てぜりふを残して店を出てしまった。

やはり暑い夏の日だったと思う。祖母はレースのパラソルを不機嫌そうに回しながら、僕の手を引き寄せて言った。

「座ったとたんに出てくる寿司なんてあるものか。あれははなっから握ってあったんだ。いくら忙しいからって、お客をこけにしちゃいけない――おなか、すいたろう。鰻でも食べようか」

うまいかまずいかという話ではなかった。祖母は客の顔も見ずに寿司を握った、その性根が気に入らなかったのだろう。

しばらく大通りを歩いて、祖母の行きつけらしい鰻屋の暖簾をくぐった。

女将らしい中年の女が出てきて、「きぬさん、お達者で何より」と③お愛想を言った。ひどく暇な鰻屋で、女将は卓のかたわらに立ったまま、長いこと祖母と世間話をしていた。

鰻はなかなか出てこなかった。僕は空腹に耐えきれず、祖母のたもとを引いて、「遅いね、おばあちゃん」と言った。

とたんに、④祖母は僕の手の甲をいやというほど叩いた。

女将はくすっと笑って奥へ入って行った。叱られた理由が僕にはわからなかった。

「おまい、鰻屋で早くしろは口がさけたって言うんじゃないよ」

「どうしてさ」

「うまい鰻はそれだけ手をかけて焼くんだ。鰻の催促は田舎者ときまってる」

早い寿司は食うな、遅い鰻は催促するなと、江戸前の作法とは何とやかましいのだろうと僕は思った。

「ちょいとの間、これで辛抱おし」

と、祖母は僕の口にドロップを入れてくれた。鼻につんと抜ける薄荷の香りを渋茶で味わいながら、僕はそのときもやはり、ガラス越しの西日に隈取(注3)られた祖母の顔を、美しいと思った。

劇的な記憶が、ひとつだけある。

亡くなるほんの半年か、一年たらず前の出来事だったと思う。

そのころ突然と、張りのある祖母の声が嗄れた。咽の痛みを訴え、いつも飴をなめるようになった。大の医者嫌いだった祖母は、父や母がいくら勧めても頑として病院に行こうとはしなかった。

いちど、むりやり連れ出そうとした祖父と摑み合いの喧嘩になり、スタジオのスポット・ライトを割ってしまった。勢い余って祖父の宝物であるライカ(注4)を大上段に⑤ふりかざしたところで、家族はわあっと声を上げた。

「ばばあ、それだけは勘弁してくれ」

と、祖父も泣きを入れた。

「あ、そうか。こいつをぶちこわしたら、おまんまの食い上げか」

と、祖母はあっさり正気に戻った。

そんなふうだから、誰もその後は医者にかかるよう勧めたりはしなくなった。

三月の節句のころだったと思う。写真館という家業は、季節の折々の記念写真を撮るので、家に起こった出来事にはきちんと歳時記(注5)が付いているのだ。

たしかスタジオのスクリーンのうしろには雛飾りが用意されており、節句にふさわしい桃の花と、写真うつりの良い黄色の菜の花が大きな花瓶に生けられていた。

祖母は何日も前から、日曜は歌右衛門(注6)の先代萩(注7)を観に行くのだと、家じゅうに触れ回っていた。

芝居といえばいつもお伴をしていた僕は、当然連れて行ってもらえるものだと思いこんでいた。ところが当日になって、急に子供なんぞ連れて行かない、と言い出した。

歌右衛門の政岡(注8)なのだから大入りはまちがいない。切符がとれやしない、というわけだ。

よそいきの仕度までして店先に出ていた僕を宥めながら、母が首をかしげた。

「大入りも何も、おかあさんはいつも当日売りの大向(注9)こうじゃないの。それだって何時間も前から並んでるくせに」

「歌右衛門の政岡を子供が観たって、何がわかるっていうんだい。立見のお客の迷惑じゃないか」

祖母は頑なに言い張った。

「だったらおかあさん、それならそうと言い聞かせておいてくれりゃいいのに。何も出がけになって――」

「子供だって楽しみにしてるんだから、はなっから連れてかないっていうのはおまい、あんまりせつないだろう」
ぐずぐずと泣きながら、僕は祖母の様子が少し妙だなと思った。何につけてもまっすぐな気性の人で、もし正当な理由があるのなら、前もって僕を納得させておくにちがいなかった。祖母は嘘をついていると思った。
「こら、お客さんだぞ。静かにしねえか」
と、スタジオから祖父が言った。
「はあい、お嬢ちゃん。ここから鳩が出るよォ。いいかね、おいっち、にイ、さん！　ほら出た」
祖父の仕事ぶりをちらりと横目で見て、⑥祖母はほうっと、背中を畳むほどの溜息をついた。それからしぶしぶ、僕の手を引いた。
（中略）
祖母が入院をしたのは、それからいくらも経たぬころだった。
病院は築地の国立がんセンターだったから、もちろん喉頭癌という病名まで知っていたのだろう。家族に黙ってこっそり検査に行き、勝手に日取りまで決めて、さっさと入院してしまったのだった。まるで熱海か鬼怒川にでも出かけるような気軽さだった。
その前の晩、祖母は改まって話があると、奥の間のちゃぶ台のまわりに家族を呼び集めた。話す前から家じゅうにしめやかな感じが漂ったのは、誰もが不吉な予感を抱いたからだろう。
灯明の炎が、濡れ羽いろの祖母の髪を背中から縁取っていた。
いきなり、こんなことを言ったと思う。
「いいかい、みんな肚くくってお聞き。あたしァ癌だ。霞町のお師匠さんに、こんど築地にできたいいお医者を紹介してもらったから、そこで往生する。痛いの辛いのと、そりゃあ多少はじたばたするかもしらないが、お天道さんの決めたことだから、おまいさん方も孝養おさめだと思って了簡（注1）しておくんない」
家族にとってはまさに青天の霹靂だった。悲嘆にくれるでも驚愕するでもなく、みなただ呆然とした。決して嘘をつかず、愚痴も言わずひたすら見栄を張り続ける祖母の性格は、誰もが承知していた。つまりその告白は、どうしようもないことだった。
「くそ。格好ばっかしつけやがって」
と、祖父は唸るようにようやく言った。
気丈な祖母は、翌朝早くひとりで入院してしまった。
裏木戸の軋みに目を覚まして、部屋つづきの物干場に出てみると、麻布十番の商店街の向こう岸を、風呂敷包みを提げて歩いて行く祖母の姿が

見えた。

まだ暗いうちに起き出し、荷物をまとめてそっと出て行ってしまったのだ。それが家族に対する思いやりだったのか、[B]だったのかはわからない。

季節は夏のかかりだったのだろうか。まだ動き出さぬ商店街にはうっすらと朝靄(あさもや)がかかっており、納豆売りとしじみ売りが、甲高(かんだか)い声を上げながら店の前をすれちがった。

祖母は藍(あい)色の絽(ろ)(注12)の着物を着、浅葱(あさぎ)色の帯を締めていた。結い上げた髪と、ぐいと落とした後ろ襟(えり)の間のうなじが、眩(まば)ゆいほどに白かった。祖母は住み慣れた店を振り返りもせず、凛(りん)と背を伸ばして歩いて行った。

誰も見ちゃいないのに、と僕は思った。

（浅田　次郎「雛の花」より）

（注1）「洒落者」……服装・動作・言語などが洗練されている人。
（注2）「おあいそ」……飲食店などの会計。
（注3）「隈取られた」……陰影や濃淡などで境目をつけられた。
（注4）「ライカ」……ドイツのライツ社（現ライカカメラ社）製のカメラ。
（注5）「歳時記」……ここでは、「一年のおりおりの自然・人事など」の意。
（注6）「歌右衛門」……中村歌右衛門という歌舞伎役者の名前。
（注7）「先代萩」……歌舞伎の演目。
（注8）「政岡」……「先代萩」の登場人物。
（注9）「大向こう」……最上階にある客席。
（注10）「孝養」……孝行。
（注11）「了簡」……ここでは、「こらえること」の意。
（注12）「絽」……絹織物の一種。夏の着物に用いる。

問一、 A にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、たとえば　　イ、すなわち　　ウ、ただし　　エ、したがって

問二、――線①「化け物のような若さ」とありますが、これは祖母のどのような様子を表していますか。文章中の言葉を使って、三十五字以内で具体的に説明しなさい。

問三、――線②「食べちゃいけないよ。出よう」と祖母が言ったのはなぜですか。その理由を「～から。」に続く形で文章中から三十字以内で探し、最初と最後の三字を抜き出して答えなさい。

問四、――線③「お愛想」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、物事に心を引かれ、興味関心を示した言葉。
イ、相手の機嫌をとるための、人当たりのいい言葉。
ウ、自分の強い意志に基づいた、しっかりした言葉。
エ、ことさらに気どっていて、おおげさな言葉。

問五、――線④「祖母は僕の手の甲をいやというほど叩いた」とありますが、それはなぜですか。「祖母」が「僕」の「手の甲」を「叩いた」理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、「僕」が空腹に耐えきれず、祖母のたもとを引いて見当違いの言動をとったから。
イ、「僕」が空腹に耐えきれず、女将に対して嫌味ともとれる非常識な言動をとったから。
ウ、「僕」が空腹に耐えきれず、鰻を催促するという江戸前の礼儀を知らない言動をとったから。
エ、「僕」が空腹に耐えきれず、鰻を焼く店員さんの苦労を考えない無礼な言動をとったから。

問六、――線⑤「ふりかざした」の主語を文章中から三字以内で探し、抜き出して答えなさい。

問七、――線⑥「祖母はほうっと、背中を畳むほどの溜息をついた。それからしぶしぶ、僕の手を引いた」とありますが、「祖母」が「僕」を連れてゆくことにした経緯を次のように説明しました。空欄にあてはまる言葉を文章中から指定された字数で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

祖母は歌右衛門の政岡は大入りで切符がとれないから「僕」を連れて行けないと言ったが、祖母はいつも歌舞伎を［1、九字］で見ているので、自分の主張には［2、五字］がないことを悟って、しぶしぶ「僕」を連れて行くことにした。

問八、［B］にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、見栄　　イ、孝養　　ウ、頑なさ　　エ、嘘

問九、祖母の人物像の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、向こうっ気が強く、何につけても自分の我を通している人物。
イ、自分より常に家族のことを思いやる、心穏やかな優しい人物。
ウ、いつでも気丈にふるまうことで、自分の弱さを隠そうとしている人物。
エ、江戸前の作法に通じ、正直で物事の筋を通そうとする人物。

三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

①科学の問題は、科学者に聞く。それは、間違ってはいません。できるだけ、専門知を活用して分析や予測ができることは必要です。

A、一〇〇％の客観性などないことも知っておきましょう。多くの科学の成果を利用するとともに、科学技術に対して②不安を抱くことも増えました。原子力発電、電磁波環境、加工食品の添加物や遺伝子組み換え食品、気候変動（地球温暖化）などの環境問題、化学物質……。多くの問題が存在しています。

生活者自身が、科学や科学技術について知識を深めると同時に、不安を生じさせない科学技術のあり方はどのようなものなのかといったことも考えていくときなのではないでしょうか。

生活者がほんとうに求める科学・科学技術のあり方はどのようなものなのか、生活者と専門家、そしてまた異なる分野の専門家同士がそれぞれの専門性を生かしながら議論ができるフィールドが必要ですし、互いの活発な対話もなくてはなりません。多くの生活者が、不安を抱かなければならない科学技術がすでにあったとしたら、つねに「発展」のみを念頭においてきたこれまでの姿勢についても、もう一度考え直さなければならない場面も出てくるでしょう。

「生活者自身のための科学――リビング・サイエンス」、生活者と専門家とがともにつくり、実現させていく科学の姿を提案したいと思います。③リビング・サイエンスなんて、ちょっと聞き慣れないことばかもしれません。それもそのはず、わたしたちはこの数年間、生活者のための科学の学びとはなにか、生活者がよりよく暮らせる科学の形はどのようなものかなど、いろいろな話し合いや研究会を重ねてきました。

科学は生活と切っても切り離せないはずである、生活の中に科学はたくさんある、生活している人がもっと自由に豊かに科学を使いこなすにはどうすればいいのか、生活している人が科学的な視点で物事を考えることができれば、もっとたくさんの工夫や楽しさが生まれるのではないか……これらの考え方を表すことばはなにか……。

「リビング・サイエンスというのはどう？」

ということばが飛び出したのです。そしてわたしたち自身の研究会にも、「リビング・サイエンス・ラボ」と名付け、いよいよリビング・サイエンスの姿についての議論や試みをはじめました。

今までなかったことばですから、わたしたち自身も手探りですし、他の人にもわかるように伝える方法を作り出して行かなければなりません。

リビング・サイエンスとはなにか……。

「こんなふうなことじゃない」「あんなことも含まれる」という議論を重ねているとき、わたしたち以前にも、リビング・サイエンスという言い方ではないけれども、④これに近いマインド(注1)を持った人がいたのではないか、という提案がありました。

（中略）

明治から大正にかけて大活躍した科学エッセイスト・寺田寅彦。彼は漱石[注2]の俳句のお弟子で、『我輩は猫である』に登場する理学士・水島寒月のモデルにもなりました。第一級の物理学者でありながら、「科学」「キネマ[注3]旬報」「俳句研究」と、ジャンル[注4]というものにとらわれず、とにかくあちこちの雑誌にエッセイを執筆しています。

寺田寅彦（一八七八～一九三五）は、「手作り実験」の達人でした。東京大学の実験物理学教授としてノーベル賞級の業績も上げていたのですが、B 、当時まだ証明されていなかったウェゲナーの「大陸移動説」に真っ先に関心を示し、水あめとおしろい（！）を使って大陸移動のシミュレーションを行いました。

そんな寅彦の科学エッセイは、目の前の、ささやかでありながら具体的な自然現象と、地球規模の壮大な自然現象やあるいは生命現象とを物理学の論理でつなごうとするものでした。

もっとも有名なエッセイのひとつ「茶わんの湯」は、大正一一年、児童文学雑誌「赤い鳥」に掲載されたわずか六ページの小品です。その中で寅彦は、熱湯が注がれた一個の茶碗を見つめることから、茶碗の中で生まれる温度差によって湯は循環し、その湯気の立ち方やお湯の流れ方に、竜巻や地球の大気の流れと同じ原理が働いていることを見いだします。

ほかにも線香花火や金平糖などを素材に「日常身辺の物理学」に関する名エッセイを次々と執筆しています。そんな寅彦から〈リビング・サイエンティスト〉を目指す私たちが学びたいのは、その〝論理的な想像力〟です。C 、「茶碗の湯」から地球の大気循環に思いをはせるだけではなく、地球スケールの現象と同じことが、いま目の前の小さな器の中で起きているということに気づく感受性です。「日常」から「地球」にいくだけでなく、「地球」から「日常」にも戻ってくることで「日常」の世界をもっと豊かにする。そんな〝論理的想像力〟を駆使した I は、寅彦が詠んだこの一句にもよくあらわれています。

「好きなもの
イチゴ 珈琲花美人
懐手して宇宙見物」

寅彦は人間と自然の関係性にも強い関心を持っていました。一見非合理的な話でも「迷信」と切り捨てたりせず、人魂[注5]を高圧放電から説明しようとしたり、日本の国づくり神話を地球物理学的に解釈したのです。

電線や水道、交通などのインフラ[注6]網が発達した近代社会では震災による混乱は以前にも増して甚大になるのが明らかなのに、関東大震災後も、いっこうに対策が進まない状況に繰り返し警告を発していますが、その原因を寅彦は人間の忘れっぽさのせいと考えました。たとえば昭和八年に三陸地方で大地震と津波が発生し三〇〇〇人の死者を出した際も、その三七年前にまったく同じ災害が起きていたにもかかわらず、三七年の間に

経験者の多くは死去し、かつての記憶が薄れてきた頃に再び悲劇は繰り返した、と述べています。こうした自然災害のタイムスパン(注7)の長さと、人間の記憶時間（と人生）の短さの比較から、この、あまりに有名なフレーズを後世に残したのです。

「⑤天災は忘れた頃にやってくる」

（佐倉 統／古田 ゆかり「おはようからおやすみまでの科学」より）

（注1）「マインド」……心。精神。意識。

（注2）「漱石」……小説家、英文学者である夏目漱石のこと。

（注3）「キネマ」……映画。シネマ。

（注4）「ジャンル」……種類。領域。特に、文芸・芸術作品の様式・形態上の分類について言う。

（注5）「人魂」……夜、空中を飛ぶ青白い火。古くから、死者から抜け出た霊が漂(ただよ)うものとされる。

（注6）「インフラ」……「インフラストラクチャー」の略。下部構造の意。社会的経済基盤と社会的生産基盤とを形成するものの総称。道路・港湾・河川・鉄道・通信情報施設・下水道・学校・病院・公園・公営住宅などが含まれる。

（注7）「スパン」……ある時間の幅。

問　一、――線①「科学の問題」とありますが、文章中ではどのような「科学」を目指していると言っていますか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から指定された字数で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

［1、三字］が［2、二字］を深めつつ、［3、三字］とともに実現させてゆくような科学。

問　二、［A］～［C］にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア、つまり　　イ、ところで　　ウ、たとえば　　エ、ただし

問三、――線②「不安を抱くことも増えました」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、発展することだけを考えてきた結果、科学技術に関するさまざまな問題が生じてしまったから。
イ、たとえ科学者であったとしても、科学技術に関する諸問題の解決は困難なものになってしまったから。
ウ、我々人間が真に求める科学や科学技術だけを研究してきた結果、想定外の問題が発生してしまったから。
エ、我々人間が発展のみを追求してきた結果、科学や科学技術に生活を支配されるようになってしまったから。

問四、――線③「リビング・サイエンス」の説明として適当でないものを次から全て選び、記号で答えなさい。

ア、生活者のための科学
イ、科学者のための科学
ウ、生活者が自由かつ豊かに使いこなせる科学
エ、科学者が科学的な視点で考える科学
オ、科学者が生活者の視点で考える科学

問五、――線④「これに近いマインドを持った人」とありますが、寺田寅彦の「マインド」はどのようなものでしたか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、第一級の物理学者でありながら、漱石の弟子として俳句にも親しんでいた心。
イ、大学でノーベル賞級の業績を上げているものの、「手作り実験」だけにこだわり続けた心。
ウ、水あめや湯などの身近なものから、地球上の壮大な自然現象を捉えようとした精神。
エ、線香花火や金平糖などを使った実験に関するエッセイを、次々に執筆しようとした精神。

問六、［　Ⅰ　］にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、日常を重視した思考方法
イ、日常から非日常への飛躍
ウ、自由な発想による思考実験
エ、思考の自在な往復運動

問七、――線⑤「天災は忘れた頃にやってくる」とありますが、寺田寅彦がこのように言ったのはなぜですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、文章中の言葉を使ってそれぞれ十五字程度で答えなさい。

［1、十五字程度］のに対して、［2、十五字程度］から。

四　次の資料を見て、あとの問いに答えなさい。

資料A　医療保険（制度）とは

相互扶助（ふじょ）の精神に基づき、病気やけがに備えてあらかじめお金（保険料）を出し合い、実際に医療を受けたときに、医療費の支払いに充てる仕組みです。患者はかかった医療費の原則1～3割を支払えば済み、残りは自分が加入する医療保険から支払われます（保険給付）。日本は全ての国民が公的な医療保険制度への加入を義務づけられています（「国民皆保険制度（こくみんかいほけんせいど）」）。

医療保険は、サラリーマンが加入する被用者保険（職域保険）、自営業者・サラリーマンOBなどが加入する国民健康保険（地域保険）、75歳以上の人が加入する後期高齢者医療制度に分けられます。

さらに被用者保険は職業によっていくつかの種類があり、主に民間企業のサラリーマンが加入する健康保険組合と全国健康保険協会（協会けんぽ）、公務員が加入する共済組合などに分かれています。

（出典：健康保険組合連合会HP〈https://www.kenporen.com/〉より）

資料C　日本の国民皆保険制度の特徴

①国民全員を公的医療保険で保障。

②医療機関を自由に選べる。（フリーアクセス）

③安い医療費で高度な医療。

④社会保険方式を基本としつつ、皆保険を維持するため、公費を投入。

資料B　医療費の一部負担（自己負担）割合について

（出典：資料B・Cは、厚生労働省HP「我が国の医療保険について」より）

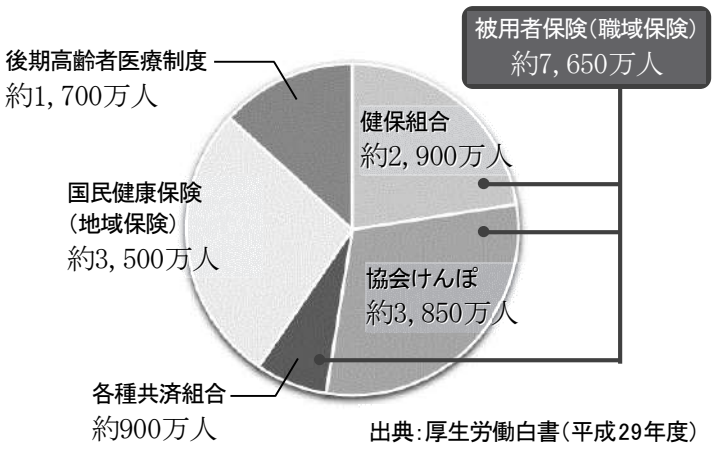
資料D　実は恵まれている！日本の国民皆保険制度

日本では1955年頃まで、農業や自営業者、零細企業従業員を中心に国民の約3分の1に当たる約3000万人が無保険者で、社会問題となっていました。しかし、1958年に国民健康保険法が制定され、61年に全国の市町村で国民健康保険事業が始まり、「誰でも」「どこでも」「いつでも」保険医療を受けられる体制が確立しました。

現在の日本の医療保険制度は、下図のようにすべての国民が何らかの公的医療保険に加入し、お互いの医療費を支え合う「国民皆保険制度」です。制度の確立からすでに50年以上も経過し、今では国民誰もが、保険証1枚で、どの医療機関にもかかれるのは当然のことだと思われています。しかし、海外に目を向けると、必ずしもそうではありません。先進国の中でも民間保険中心の制度もありますし、無保険の国民を多く抱える国も存在します。日本の医療保険制度に対する評価は高く、世界トップクラスの長寿国になり、乳児死亡率などの健康指標も首位を占めています。2000年には世界保健機関（WHO）から日本の医療保険制度は総合点で世界一と評価されました。日本の国民皆保険制度は世界に誇れる制度なのです。

現在働いている人が病院の窓口で支払う金額は、かかった医療費の3割。残りの7割は、皆さんと事業主が納める健康保険料から支払われています。

（出典：健康保険組合連合会HPより）



出典：厚生労働白書（平成29年度）

資料E　社会保障財政「①焼け石に水」　高齢者負担増でも、現役世代さらに

一定の所得がある75歳以上の医療費窓口負担を引き上げる医療制度改革関連法案が3日、参院厚生労働委員会で賛成多数で可決され、4日の本会議で成立する見通しとなった。高齢者の医療費を賄(まかな)う若い世代の負担を抑制するのが狙いだが、抑制による財政効果は限られる。審議では、さらなる制度の見直しを求める意見が相次いだ。　（出典:「毎日新聞」2021年6月3日記事より）

資料F　75歳以上医療費2割負担、関連法成立　年収200万円から

一定の所得がある75歳以上の後期高齢者の医療費窓口負担を1割から2割に引き上げる医療制度改革関連法が4日の参院本会議で、自民・公明両党などの賛成多数で可決、成立した。単身世帯は年金を含めて年収200万円以上、複数世帯では合計320万円以上が対象になる。高齢者に収入に応じた支払いを求めて現役世代の負担を抑制する狙いだが効果は限定的だ。

現在、75歳以上の大半は窓口負担が1割だ。現役並みの所得（単身で年収383万円、複数世帯で520万円以上）の人は3割を負担するが全体の7%にすぎない。2割負担の層をつくり、3段階とする。2割負担となるのは75歳以上の約20%で約370万人が該当する。

（出典:「日本経済新聞」2021年6月4日記事より）

資料G　負担をめぐる世代間格差の是正が狙い

政府が75歳以上の医療費を1割から2割負担へと切り替えようとする背景には、今後、少子高齢化によってますます社会保障費負担の世代間格差が広がるおそれがあるためです。

現在、75歳以上の1人当たりの年間医療費は、2016年度時点で平均91万円。3割負担が続いている65歳未満での平均額18万円の5倍に相当します。しかも医療費全体の4割を現役世代の保険料が支えています。

現役世代と、実際に手厚い医療を受けている高齢者世代の負担の格差は、2022年にはさらに加速すると予測されています。

2022年、昭和22～24年生まれの「団塊(だんかい)の世代」が75歳以上になり始めると、現在の1割負担のままでは社会保障費の極大化が避けられないからです。これまで、政府は後期高齢者医療制度の創設や介護保険制度の改革など、高齢者の保険料と給付のバランスを図るべく施策を実施してきました。

しかし、2025年問題が話題になるように、団塊の世代が75歳以上になると、日本社会は4人に1人が後期高齢者。消費増税や景気の先行きが不透明な時代に、現役世代の負担はさらに深刻化するのです。

そのため、政府は2022年からの窓口負担割合の切り替えを急いでいるのです。

（出典:「みんなの介護」〈https://www.minnanokaigo.com/〉より）

資料H　団塊世代

日本の、1947（昭和22）年から1949（昭和24）年にかけて生まれた世代の人間をさす言葉。終戦後の第1次ベビーブームに生まれた世代で、出生数は約806万人、現在の人口は約700万人で、その前後の世代をあわせて最大の人口集団をつくる。人口が多く入学や就職できびしい競争を経験してきたため独特の生活意識をもっている世代ともいわれる。「戦争を知らない子どもたち」、1960年代の大学紛争(ふんそう)にかかわった「全共闘(ぜんきょうとう)世代」ともよばれたが、作家堺屋太一の命名によって「団塊の世代」（団塊世代）の名前が定着した。

（出典:「学研キッズネット」〈https://kids.gakken.co.jp/〉）

問一、資料E中の――線①「焼け石に水」とは、どのような意味ですか。他の資料中の文章から五字以上十字以内で抜き出して答えなさい。

問二、資料A～Hから読み取れることとして適当でないものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

ア、医療制度改革関連法の施行によって医療費を二割以上負担する後期高齢者の割合は、七十五歳以上の三割程度にすぎない。
イ、六歳以上七十歳未満の日本の国民は、医療費の三割は個人で負担するが、残りの七割は事業主（会社）が支払ってくれる。
ウ、日本のように国民誰もが医療機関を自由に選んで診察を受けられるのは、海外では必ずしも当たり前のことではない。
エ、公的な財源で個人の医療費負担を抑え、無保険の国民でも医療機関を自由に選べるようにしたことを「フリーアクセス」という。
オ、高齢化社会を見越して成立したばかりの「国民皆保険制度」だが、早くも制度見直しの改正案が与党の賛成多数で可決した。
カ、医療制度改革関連法の成立によっても、例えば年収が四百万円以上ある単身の後期高齢者の医療費負担額はこれまで通りである。
キ、二〇二五年には団塊の世代が全て後期高齢者となるため、公的医療保険からの支払額が増える見込みである。

用紙ヨコ 上 こちらを上にしてください

令和4年度 S特選コース（4教科型）

第2回 中学校入学試験問題 〔国語〕 解答用紙 （2月2日午後）

注意事項
・解答は解答欄の枠内に濃くはっきりと記入して下さい。
・解答欄以外の部分には何も書かないで下さい。

氏名

受験番号

評価点

〈受験生はこれより上段には記入しないこと〉

一 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

二 九 八 七 2 1 六 五 四 三 二 一

三 七 2 1 六 五 四 三 二 C B A 一 3 2 1

四 二 一

一

1 金物

2 同窓

3 鋼鉄

4 日和

5 築（く）

6 カメイ

7 ボケツ

8 アンイ

9 チンタイ

10 ミチビ（く）

二

問一

問二 35 30 20 10

問三 最初 ～ 最後 から。

問四

問五

問六

問七 1 2

問八

問九

三

問一 1 2 3

問二 A B C

問三

問四

問五

問六

問七 1 15 10 2 15 10

四

問一 〈5〉 10

問二